

妙法蓮華經。法師功德品。第十九

爾の時に佛、常精進菩薩摩訶薩に告げたまわく、
若し善男子・善女人是の法華經を受持し、若しは讀み、若しは誦し、若しは解説し、若しは書寫せん。是の人は當に八百の眼の功德・千二百の耳の功德・八百の鼻の功德・千二百の舌の功德・八百の身の功德・千二百の意の功德を得べし。是の功德を以て六根を莊嚴して皆清淨ならしめん。

是の善男子・善女人は父母所生の清淨の肉眼をもつて、三千大千世界の内外の所有る山・林・河・海を見ること、下阿鼻地獄に至り、上有頂に至らん。亦其の中は一切衆生を見、及び業の因縁・果報の生處悉く見、悉く知らん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

若し大衆の中に於て 無所畏の心を以て

是の法華經を説かん 汝其の功德を聽け

是の人は八百の 功德ある殊勝の眼を得ん

是れを以て莊嚴するが故に 其の目甚だ清淨ならん

父母所生の眼をもつて 悉く三千界の

内外の彌樓山 須彌及び鐵圍

并に所餘の山林 大海・江河水を見ること

下阿鼻獄に至り 上有頂天に至らん

其の中の諸の衆生 一切皆悉く見ん

未だ天眼を得ずと雖も 肉眼の力是の如くならん

復次に常精進、若し善男子・善女人此の經を受持し、若

しは讀み若しは誦し、若しは解説し若しは書寫せん。千二百の耳の功德を得ん。是の清淨の耳を以て三千大千世界の下阿鼻

地獄に至り、上有頂に至る、其の中の内外の種種の所有る
 語言の音聲・象聲・馬聲・牛聲・車聲・啼哭聲・愁歎
 聲・螺聲・鼓聲・鐘聲・鈴聲・笑聲・語聲・男聲・
 女聲・童子聲・童女聲・法聲・非法聲・苦聲・樂聲・
 凡夫聲・聖人聲・喜聲・不喜聲・天聲・龍聲・夜叉聲
 ・乾闥婆聲・阿修羅聲・迦樓羅聲・緊那羅聲・摩睺羅伽
 聲・火聲・水聲・風聲・地獄聲・畜生聲・餓鬼聲・
 比丘聲・比丘尼聲・聲聞聲・辟支佛聲・菩薩聲・佛聲
 を聞かん。要を以て之を言わば三千大千世界の中の一切内外
 の所有る 諸の聲、未だ天耳を得ずと雖も、父母所生の
 清淨の常の耳を以て皆悉く聞き知らん。是の如く種種の
 音聲を分別すとも而も耳根を壞らじ。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説い
 て言わく、

父母所生の耳 清淨にして濁穢なく

此の常の耳を以て 三千世界の聲を聞かん

象・馬・車・牛の聲 鐘・鈴・螺・鼓の聲

琴瑟・箜篌の聲 簫笛の音聲

清淨好歌の聲 之を聽いて著せじ

無數種の人の聲 聞いて悉く能く解了せん

又諸天の聲 微妙の歌の音を聞き

及び男女の聲 童子・童女の聲を聞かん

山川・險谷の中の 迦陵頻伽の聲

命命等の諸鳥 悉く其の音聲を聞かん

地獄の衆の苦痛 種種の楚毒の聲

餓鬼の飢渴に逼められて 飲食を求索する聲

諸の阿修羅等 大海の邊に居在して

自ら共に言語する時 大音聲を出すをも

是の如き説法者は 此の間に安住して

遙かに是の衆の聲を聞いて 耳根を壞らじ

十方世界の中の 禽獸の鳴いて相呼ばう

其の説法の人 此に於て悉く之を聞かん

其の諸の梵天上 光音及び徧淨

乃至有頂天 言語の音聲

法師此に住して 悉く皆之を聞くことを得ん

一切の比丘衆 及び諸の比丘尼

若しは經典を讀誦し 若しは他人の爲に説かん

法師此に住して 悉く皆之を聞くことを得ん

復諸の菩薩あつて 經法を讀誦し

若しは他人の爲に説き 撰集して其の義を解せん

是の如き諸の音聲 悉く皆之を聞くことを得ん

諸佛大聖尊の 衆生を教化したもう者

諸の大會の中に於て 微妙の法を演説したもう

此の法華を持たん者は 悉く皆之を聞くことを得ん

三千大千界の 内外の諸の音聲

下阿鼻獄に至り 上有頂天に至るまで

皆其の音聲を聞いて 耳根を壞らじ

其の耳聰利なるが故に 悉く能く分別して知らん

是の法華を持たん者は 未だ天耳を得ずと雖も

但所生の耳を用うるに 功德已に是の如くならん

復次に常精進、若し善男子・善女人是の經を受持し、若し

は讀み、若しは誦し、若しは解説し、若しは書寫せん。八百の

鼻の功德を成就せん。是の清淨の鼻根を以て、三千大千

世界の上下内外の種種の諸の香を聞かん。須曼那華香・闍提

華香・末利華香・瞻蔔華香・波羅羅華香・赤蓮華香・青蓮華香・白蓮華香・華樹香・果樹香・梅檀香・沈水香・多摩羅跋香・多伽羅香及び千萬種の和香、若しは抹せる若しは丸せる若しは塗香、是の經を持たん者は此の間に於て住して、悉く能く分別せん。

又復衆生の香・象の香・馬の香・牛羊等の香・男の香・女の香・童子の香・童女の香、及び艸木叢林の香を別え知らん。若しは近き若しは遠き所有る諸の香、悉く皆聞ぐことを得て分別して錯らじ。

是の經を持たん者は、此に住せりと雖も亦天上諸天の香を聞がん。波利質多羅・拘鞞陀羅樹香及び曼陀羅華香・摩訶曼陀羅華香・曼陀羅華香・曼殊沙華香・摩訶曼殊沙華香・梅檀・沈水・種種の抹香・諸の雜華香、是の如き等の天香和合して出す所の香、聞ぎ知らざることなけん。

又諸天の身の香を聞がん。釋提桓因の勝殿の上にあつて、五欲に娛樂し嬉戲する時の香、若しは妙法堂の上にあつて、忉利の諸天の爲に說法する時の香、若しは諸の園に於て遊戯する時の香、及び餘の天等の男女の身の香、皆悉く遙かに聞がん。

是の如く展轉して乃ち梵天に至り上有頂に至る諸天の身の香、亦皆之を聞ぎ、并に諸天の焼く所の香を聞がん。及び聲聞の香・辟支佛の香・菩薩の香・諸佛の身の香、亦皆遙かに聞いて其の所在を知らん。此の香を聞くと雖も然も鼻根に於て壞らず錯らじ。若し分別して他人の爲に説かんと欲せば憶念して謬らじ。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

是の人は鼻清淨にして 此の世界の中に於て
若しは香しき若しは臭き物 種種悉く聞き知らん
須曼那・闍提 多摩羅・梅檀
沈水及び桂香 種種の華・果の香
及び衆生の香 男子・女人の香を知らん
說法者は遠く住して 香を聞いて所在を知らん
大勢の轉輪王 小轉輪及び子
群臣 諸の宮人 香を聞いて所在を知らん
身に著たる所の珍寶 及び地中の寶藏
轉輪王の寶女 香を聞いて所在を知らん
諸人の嚴身の具 衣服及び瓔珞
種種の塗れる所の香 聞いて則ち其の身を知らん
諸天の若しは行坐 遊戲及び神變
是の法華を持たん者は 香を聞いて悉く能く知らん
諸樹の華・果實 及び蘇油の香氣
持經者は此に住して 悉く其の所在を知らん
諸山の深く峻しき處に 梅檀樹の華敷き
衆生中に在る者 香を聞いて皆能く知らん
鐵圍山大海 地中の諸の衆生
持經者は香を聞いて 悉く其の所在を知らん
阿修羅の男女 及び其の諸の眷屬の
鬪諍し遊戲する時 香を聞いて皆能く知らん
曠野險隘の處の 師子・象・虎・狼
野牛・水牛等 香を聞いて所在を知らん
若し懷妊せる者あつて 未だ其の男女
無根及び非人を辨えざらん
香を聞いて悉く能く知らん

香を聞く力を以ての故に 其の初めて懐妊し
成就し成就せざる

安樂にして福子を産まんことを知らん

香を聞く力を以ての故に 男女の所念

染欲癡恚の心を知り 亦善を修する者を知らん

地中の衆の伏藏 金・銀諸の珍寶

銅器の盛れる所 香を聞いて悉く能く知らん

種種の諸の瓔珞 能く其の價を識ることなき

香を聞いて貴賤 出處及び所在を知らん

天上の諸華等の 曼陀曼殊沙

波利質多樹 香を聞いて悉く能く知らん

天上の諸の宮殿 上・中・下の差別

衆の寶華の莊嚴せる 香を聞いて悉く能く知らん

天の園林・勝殿諸觀・妙法堂

中であつて娛樂する 香を聞いて悉く能く知らん

諸天の若しは法を聽き 或は五欲を受くる時

來往・行・坐・臥する 香を聞いて悉く能く知らん

天女の著たる所の衣 好き華・香をもつて莊嚴して

周旋し遊戯する時 香を聞いて悉く能く知らん

是の如く展轉し上つて 乃ち梵天に至る

入禪・出禪の者 香を聞いて悉く能く知らん

光音・徧淨天 乃ち有頂に至る

初生及び退歿 香を聞いて悉く能く知らん

諸の比丘衆等の 法に於て常に精進し

若しは坐し若しは經行し 及び經法を讀誦し

或は林樹の下にあつて 專精にして坐禪する

持經者は香を聞いて 悉く其の所在を知らん

菩薩の志 堅固にして 坐禪し若しは經を讀み

或は人の爲に說法する 香を聞いて悉く能く知らん

在在方の世尊の 一切に恭敬せられて

衆を愍んで說法したもう 香を聞いて悉く能く知らん

衆生の佛前にあつて 經を聞いて皆歡喜し

法の如く修行する 香を聞いて悉く能く知らん

未だ菩薩の 無漏法生の鼻を得ずと雖も

而も是の持經者は 先ず此の鼻の相を得ん

復次に常精進、若し善男子・善女人是の經を受持し、若し

は讀み、若しは誦し、若しは解説し、若しは書寫せん。千二百

の舌の功德を得ん。若しは好、若しは醜、若しは美、若しは

不美、及び諸の苦澀物、其の舌根に在かば皆變じて上味と成

り、天の甘露の如くにして美からざる者なけん。若し舌根を以

て大衆の中に於て演説する所あらんに、深妙の聲を出して能

く其の心に入れて皆歡喜し快樂せしめん。

又諸の天子・天女・釋・梵・諸天、是の深妙の音聲、

演説する所ある言論の次第を聞いて、皆悉く來り聽かん。

及び諸の龍・龍女・夜叉・夜叉女・乾闥婆・乾闥婆女・

阿修羅・阿修羅女・迦樓羅・迦樓羅女・緊那羅・緊那羅女・

摩睺羅伽・摩睺羅伽女、法を聽かんが爲の故に皆來つて親近

し恭敬供養せん。及び比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・國王

・王子・群臣・眷屬・小轉輪王・大轉輪王・七寶千子・内外

の眷屬、其の宮殿に乗じて俱に來つて法を聽かん。是の菩薩

善く說法するを以ての故に、婆羅門・居士・國內の人民、其

の形壽を盡くすまで隨侍し供養せん。又諸の聲聞・辟支佛

・菩薩・諸佛常に樂つて之を見たまわん。是の人の所在の

方面には、諸佛皆其の處に向つて法を説きたまわん。悉く

能く一切の佛法を受持し、又能く深妙の法音を出さん。
爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

是の人は舌根淨くして 終に惡味を受けじ

其の食噉する所あるは 悉く皆甘露とならん

深淨の妙聲を以て 大衆に於て法を説かん

諸の因縁・諭を以て 衆生の心を引導せん

聞く者皆歡喜して 諸の上供養を設けん

諸の天・龍・夜叉 及び阿修羅等

皆恭敬の心を以て 共に來つて法を聽かん

是の說法の人 若し妙音を以て

三千界に徧滿せんと欲せば

意に隨つて即ち能く至らん

大小の轉輪王 及び千子眷屬

合掌し恭敬の心をもつて 常に來つて法を聽受せん

諸の天・龍・夜叉 羅刹・毗舍闍

亦歡喜の心を以て 常に樂つて來り供養せん

梵天王・魔王 自在・大自在

是の如き 諸の天衆 常に其の所に來至せん

諸佛及び弟子 其の說法の音を聞いて

常に念じて守護し 或時は爲に身を現じたまわん

復次に常精進、若し善男子・善女人是の經を受持し、若し

は讀み、若しは誦し、若しは解説し、若しは書寫せん。八百の

身の功德を得て、清淨の身、淨瑠璃の如くにして、衆生の

見んと熹うを得ん。其の身淨きが故に、三千大千世界の衆生

の生ずる時・死する時・上下・好醜、善處・惡處に生ず

る、悉く中に於て現ぜん。及び鐵圍山・大鐵圍山・彌樓山・

摩訶彌樓山等の諸の山王、及び其の中の衆生悉く中に於て現ぜん。下阿鼻地獄に至り上有頂に至る所有及び衆生、悉く中に於て現ぜん。若しは聲聞・辟支佛・菩薩・諸佛の説法する、皆身中に於て其の色像を現ぜん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

若し法華經を持たんは 其の身甚だ清淨なること

彼の淨瑠璃の如くにして 衆生皆見んと憙わん

又淨明なる鏡に 悉く諸の色像を見るが如く

菩薩淨身に於て 皆世の所有を見ん

唯獨自ら明了にして 餘人の見ざる所ならん

三千世界の中の 一切の諸の群萌

天・人・阿修羅 地獄・鬼・畜生

是の如き 諸の色像 皆身中に於て現ぜん

諸天等の宮殿 乃ち有頂に至る

鐵圍及び彌樓 摩訶彌樓山

諸の大海水等 皆身中に於て現ぜん

諸佛及び聲聞 佛子・菩薩等の

若しは獨若しは衆にあつて 説法する 悉く皆現ぜん

未だ無漏法性の 妙身を得ずと雖も

清淨の常の體を以て 一切中に於て現ぜん

復次に常精進、若し善男子・善女人、如來の滅後に是の經を受持し、若しは讀み、若しは誦し、若しは解説し、若し

は書寫せん。千二百の意の功德を得ん。是の清淨の意根を

以て乃至一偈・一句を聞くに、無量無邊の義を通達せん。是の

義を解り已つて、能く一句・一偈を演説すること、一月・四

月・乃至一歲に至らん。諸の所説の法、其の義趣に隨つ

て、皆實相と相違背せじ。若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等を説かんも、皆正法に順ぜん。三千大千世界の六趣の衆生、心の行ずる所、心の動作する所、心の戲論する所、皆悉く之を知らん。未だ無漏の智慧を得ずと雖も、而も其の意根の清淨なること此の如くならん。是の人の思惟し等量し言説する所あらんは、皆是れ佛法にして眞實ならざることなく、亦是れ先佛の經の中の所説ならん。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

是の人は意清淨に 明利にして穢濁なく
此の妙なる意根を以て 上中下の法を知り
乃至一偈を聞くに 無量の義を通達せん
次第に法の如く説くこと 月四月より歳に至らん
是の世界の内外の 一切の諸の衆生
若しは天・龍及び人 夜叉・鬼神等
其の六趣の中に在る 所念の若干種
法華を持つつ報は 一時に皆悉く知らん
十方無数の佛 百福莊嚴の相あつて
衆生の爲に説法したもう 悉く聞いて能く受持せん
無量の義を思惟し 説法すること亦無量にして
終始忘れ錯らじ 法華を持つつを以ての故に
悉く諸法の相を知り 義に隨つて次第を識り
名字語言を達して 知れる所の如く演説せん
此の人の所説あるは 皆是れ先佛の法ならん
此の法を演ぶるを以ての故に 衆に於て畏るる所なけん
法華經を持つつ者は 意根淨きこと斯の若くならん
未だ無漏を得ずと雖も 先ず是の如き相あらん

是この人ひと此この經きょうをたも持もち 希けう有うの地ぢに安あん住じゆうして
一切さいしゆ衆じゆう生じゆうの 歡かん喜ぎして愛あい敬きやうすることを爲えん
能よく千まん萬じゆ種しゆの 善ぜん巧きやうの語ご言ごんを以もつて
分ぶん別べつして演えん說せつせん 法ほ華けき經きやうをたもつが故ゆえなり

妙み法ぼう蓮れん華げき經きやう卷くわん第だい六ろく